鳴門教育大学研究紀要
第25巻　2010

乳幼児との関わりと心理臨床

―― 臨床心理士養成のための保育実習のあり方 ――

山　下　一　夫*，中　野　秀　美**，中　津　郁　子***

（キーワード：保育実習，心理臨床，情動調律）

Ⅰ　研究の背景

乳幼児期における親子の関わりは，言うまでもなく子どもの発達において非常に重要なものである。例えば，子どもは養育者に対し，微笑，身振り，表情，音声などの模倣が見られる。このような非言語的なものを通したコミュニケーションにより，子どもは養育者との情緒的な絆を強くし，相互の関係を築いていくのである。また，母親は子どもの情動に合わせて関わり方を調節する「情動調律 affect attunement」（Stern, D.N.・1985）という相互作用が見られる。Stern, D.N.によると，「模倣が外的形式を伝える主な方法であるのに対し，調律は，内的状態の共有を交し，知らせ合うのに不可欠な方法である」とし，「模倣は形式を，調律は感情を表す」と述べている。

このような安定した関係のもとで，子どもは母親とのアタッチメント（愛着）を形成していく。その結果，山下（1999）は「やすらぎを与えてくれる母親を基地として，外界に好奇心を向け積極的に行動に出ていく。そして再び基地である母親のもとに戻り，『エネルギー補給・refueling』するかのごとく活力を回復する」とし，それを「依存と自立のサイクル」と名付けている。

一方，養育者は子どもの働きかけを敏感に察知し，適切に反応することを忘れてはならない。これに関して，榎本（1985）は，子どもが自力でできる範囲を常に見極めておくことが大切だと述べており，子どもが自分で考え，試すことができるようにうまく場面を整えてやることが必要としている。

乳幼児期の子どもと親の関わりを見ていると，自然でありながらも，とても上手なやり取りをしていることが分かる。このような関わりは，カウンセリングにおいても必要なスキルであり，カウンセラーの基本的態度や力量にもつながることではないだろうか。カウンセリング場面においても，まず大切なことは，関係作りである。このことから，心理臨床家を目指す者にとって乳幼児期の子どもとの関わりは，情動調律を育み，心理臨床活動を行うにあたって必要なものを身に付けることができるのではないかと考えられる。

そこで本研究では，保育園での乳幼児期の子どもとの関わりを振り返りながら，気付いたこと，学んだことをまとめるとともに，カウンセリングとの関係についても検討する。

Ⅱ　事例の概要

1．方法

前述の目的を検討するため，中野（大学院生）がX年4月より，週2回午前中のみZ県Y保育園に参加し，1歳児クラスと2歳児クラスを対象として子どもの関与観察を行った。そして，週1回50分のスーパーヴィジョンを心理臨床経験30年以上の大学教員である山下から受けた。また，幼稚園教諭歴20年以上かつ心理臨床経験10年以上の大学教員である中津より，保育園の関与観察にあたり，事前事後指導を受けた。

2．Y保育園の概要

Z県にある，私立保育園。2ヶ月児から3歳児の保育を行い，一時保育の受け入れもしている。クラスは，0歳児クラス7名，1歳児クラス11名，2歳児クラス17名，3歳児クラス19名に分かれている。筆者が関わった

*鳴門教育大学大学院学校臨床実践コース
**鳴門教育大学心理・教育相談室
***鳴門教育大学大学院臨床心理士養成コース

X 年度は54名の園児が在籍した。０～２歳児クラスに各３名，３歳児クラスに１名の女性保育士が担任として常時在籍し，フォローとして他の保育士が入ることもある。その他の職員も含め22名の職員が在籍。保育時間は，８時30分～17時30分までとなっており，延長保育も可能である。その中で，子ども達は室内遊び，戸外遊び，お昼寝，おやつ，昼食を行う。

Y 保育園では，日常の保育にわらべうたを取り入れたり，園児一人ひとりが保護者手作りの赤ちゃん人形を１体ずつ保育園に置いていたりと様々な工夫がなされている。年間行事も数多く行われ，園児一人ひとりの誕生会や親子で参加する遠足や運動会などがある。土曜保育も行われており，親が忙しい場合には，利用することができる。

３．事例の内容

１歳児クラスと２歳児クラスに在籍する園児のうち，筆者と関わることが多かった２名の事例を取り上げた。関わりは，X 年４月～11月のものである。

Ⅲ　事例 A

１．臨床像（X 年４月１日現在）

A：１歳６ヶ月。女児。１歳児クラス。おとなしく，小柄で可愛らしい。保育士に甘える傾向がある。タオルを離さず，指しゃぶりも見られる。

２．経過　A の発言「　」，保育士の発言『　』，筆者の発言〈　〉

第１期　A のお気に入りのタオルをきっかけに関係作りをしていく時期：４月～５月

A との初めての直接的な関わりは，＃２であった。A お気に入りのタオルが棚に置かれたまま保育士が渡し忘れるという場面があり，A は泣きそうになりながら，棚を指差して「んーんー」と筆者に言うので，それを取って渡す。＃３，筆者を未だに不思議そうに見るが，部屋へ入ると一緒に遊ぼうという仕草をする。２人で遊んでいる時には楽しそうに遊ぶのだが，途中で誰かが入ってくると，スーッと別の場所へ行ってしまう。一緒に遊ぶにつれて距離が近づくようになり（＃４～），彼女のタオルが手元になくなると，筆者に「ガーゼ，ガーゼ」と言って，不安そうな顔を見せる。A が筆者の手を握り，一緒にそれを探しに行って見つけると，ホッとしたような表情になる A。食事へ行く際には，筆者に「ガーゼ」と自分のタオルをズボンのウエスト部分に掛けるよう指示をしたり（＃６），＃７で他児にタオルを取られそうになった時には，筆者が A のそばへ行き，〈これは A ちゃんのなぁ〉と A の気持ちを代弁したりすることがあった。

＃５，登園しても，タオルを持ったまま他児が遊ぶ様子を遠くから見るだけの A。〈A ちゃんどうしたの？〉と声をかけるが，淋しそうにしている。〈A ちゃん，一緒に遊ぼう〉と誘ってみるが，遊ぼうとはせず，指しゃぶりをしながらタオルのタグを探し始める。〈これ（タグ）探してるの？　A ちゃんこれ好き？〉と聞くと，頷き，タグを見つけると安心する。その後，一緒に玩具で遊ぶ。〈A ちゃん，これできるんやなぁ。もう１回やってみて〉〈すごいな～！〉と言うと熱中してしばらく遊ぶものの，眠いのか「ネンネしたい，ネンネした～い」と筆者に訴えるが，昼寝の時間に寝られなかったら困るかと思い，〈ネンネしたいんなぁ。A ちゃん眠いんよなぁ〉と気持ちは受け止め，代替案を出してみるが，それは嫌だと示す A。筆者にも自ら寄ってくるようになるが，「ネンネしたぁ～い」と訴えることがほとんど（＃６～＃８）。〈それ（A ちゃんのタオル）に何がおるんー？〉とタオルに描かれているキャラクターについて聞いてみるなど，他の話題に変えてみたが，やはり同じことを訴える A。寝転べるマットを敷いてやると，嬉しそうに横になり，タオルを握ったままスヤスヤ眠る。

＃８，外へ遊びに行く際にも，機嫌よく出て行くが，しばらくすると「ネンネしたぁ～い」。他児も遊んでいたため，部屋に入ることができず，筆者が A を抱っこして遊ぶことに。A はとても喜ぶが，しばらくして下へ降ろそうとすると，「いやぁ～！」と訴え，部屋へ入るまでずっと抱っこすることになる。機嫌よく部屋へ入り，いつもより多くしゃべっていた A。この頃から，言葉数が増え，他児と関わることや筆者へ自分の気持ちを伝えることが増えてきた。

第２期　筆者とのやりとりが増え，他児との関わりも増えてくる時期：６月～７月

＃９，〈おはよう〉と言うと，最初は不信そうにするが，筆者のことを覚えていたようで，「ネンネ～」とやって来る。しばらくマットの上でボーっとするが，他児が遊んでいるのを見てうろうろし始める。甘えているのか，天井に吊ってある物を抱っこして触らせてという仕草を見せる。＃10になると，筆者に「おはよう」「○○さん（保育士）きたん～」と話しかける。保育士に抱きつきに行ったり，他児の名前を呼んだりしている姿が見られ

たり，園庭で遊んでいる時には，姉と手をつなぎ，「みてー！」と大きな声で叫んでいる姿が印象的であった。

＃11では，A 自ら筆者のもとへ。髪を２つに結んでおり，いつもと違う雰囲気だったので，〈A ちゃん可愛いの付けとるねー〉と言うと，少し照れながらも嬉しそうにする A。ままごとで A が料理し始めたので，〈A ちゃん，マンマ作ってくれるんー。嬉しいなぁ〉と言うと，彼女は一生懸命作る。〈A ちゃんのマンマおいしいよ～〉と食べる真似をすると，どんどん追加。筆者に“あーん”をさせ，A が食べさせてくれる。他児がやって来ると，その子にも“あーん”をさせて食べさせる。〈もっと食べたーい！〉と“あーん”すると，皿に残ったご飯を上手にスプーンを動かしてまとめ，最後のご飯を食べさせてくれる。＃12，他児と順調に遊んでいたが，タオルがないことを気にして筆者のもとへ来て「ガ～ゼ～！」と泣く。もともと今日はタオルを持って来ていなかったようで筆者は焦るが，代わりの物がないか一緒に見に行き，〈A ちゃん，このガーゼでいいん？〉「うん」と早速タオルを握りしめ，機嫌が直るという出来事もある。園庭では，土管に入って筆者とイナイイナイバァ遊びをするようになる（＃12）。また，滑り台の上に登った A が筆者とタッチし，滑ってきた A を筆者が手を広げて待っていると，笑顔で彼女は飛びついてくる。＃13では，「ゆらゆらして～」とブランコを揺らすことを要求。〈ばぁ！〉と A と目を合わせながらブランコを揺らすと，「キャッキャ！」と非常に喜ぶ。

＃16，部屋へ行くと，A が駆け寄ってくる。筆者の顔も覚えたようで，最近は名前を一生懸命覚えようとしている様子。着替えの際，まだまだ言葉は覚束ないが，ニュアンスから「秀美ちゃんと一緒に着替えるー」と言うことも。ままごとでは，筆者の口元までスプーンやコップを持ってきて，食べさせてくれる。〈あー，おいしい！〉と言うと，どんどん食べさせてくれる。時には「もうないよー」と言い，〈えーん〉と泣くと，再び食べさせてくれる。他には，「鬼ですよ～」と両手を筆者のほうまで持ってきて，怖がらせる。〈ひゃ～！怖い～！〉と怖がると，非常におもしろがる。「鬼はいないですよ～」〈わ～。よかったぁ～！〉「鬼ですよ～！」などということを何回か繰り返す。

他児との関わりも増え，＃９で A が落としたタオルを他児が彼女のもとへ持って来てくれた際には，「ありがとう」と言うことも。他児にも興味を示し始め，指差して「あれ誰～？」「あれは～？」と筆者に聞いてくる。それぞれの名前を教えると，その名前を繰り返し言い，まるで名前を覚えようとしているかのよう（＃11）。他には，保育士のためにご飯を作り，遠くにいるにも関わらず「どうぞー」と作ったご飯をあげに行くこともある（＃12）。＃13にはクラス替えがあり，A が２歳児クラスへ移る。筆者が部屋へ行くと，姉と同じクラスになったことを教えてくれる。姉がいることで A は楽しそうにままごとをし，姉の真似をして，「これは辛いですよ～」など，今まであまり使わなかった言葉を使うことも。弁当箱に料理を入れ，１人で遠足に出かけることもあり，誰かが隣にいなくても１人で行けるようにもなったことに気付く。また，A が社交的になってきた印象を受けた。

第３期　担任と一対一の関わりを求める時期：X 年８月

担任に甘え，ずっと泣いており，「かあか～」と母親を恋しがる姿も見られる（＃18，19）。８月に入ってずっとそのような状態とのこと。一時保育の女児がおり，その子が泣き出すと A も同じように泣き始めるよう。筆者が声を掛けてもまったく聞く耳を持たず，担任の名をずっと呼びながら泣く。泣いていない時には筆者も関わることができ，ままごとではご飯を作って「からーい」「あまーい」など言いながら，筆者にごちそうしてくれる。＃20，筆者を見ても寄ってくることはなく，遊ぶこともない。泣くことはなくなったようだが，ずっと担任について回っている状態。たまにタオルも持っており，眠くなるとぐずる。

第４期　A が頼もしくなってくると同時に，再び甘えがでてくる時期：９月～10月

＃21，泣くことも減り，少しずつ以前の A に戻りつつある。園庭で遊んでいる時にも筆者のもとへ寄ってきたり，大声で叫んだりする。担任がいなくても，平気で楽しく遊んでいることも。部屋で筆者とパズルで遊んでいる時には，「あげんよ～」「いや～」などといたずらっ子のような姿がうかがえる。筆者を軽く叩いてくるので，〈え～ん〉と泣く真似をすると，「よしよし」と頭をなでる。

園庭では，大きな声で「ゆらしてー」とブランコを揺らすよう言ったり，筆者が座って揺らしていると，「立って！」と要求したりする（＃23，24）。また，A が大きい子用の三輪車に乗り，足が着かないため，筆者がそれを押すと非常に楽しそうにする。「しゅっぱーつ」〈進行～〉と２人でかけ声をかけながら，「こっちー」「あっちー」と A が指示しながら遊ぶ。また，玩具の車に乗って「いってきま～す」「またね～」など言いながら動かす。後ろに乗っている砂を筆者の手に乗せてくれ，〈ありがとうございま～す〉〈いってらっしゃーい〉と言うと，楽しそうな表情を見せる A。次に，A が筆者に座席の横に乗るよう指示。しかし，筆者は乗ることができなかったため，何か代わりになるものはないかと探す。結局，A からもらった砂を A の横に乗せ，出発させる。部

屋に入ってからもAと目が合うことが多く，ニコッと微笑む。また，筆者のもとへ手をつなぎに来たり，遠くから走ってきたりすることもあり，人なつっこいAの姿がうかがえた。＃26では，ままごとでご馳走してくれ，Aの「熱いですよー」「冷たい」というコップに対し，筆者が大きく反応すると，「キャッキャ」と喜ぶ。くすぐり遊びも増える。

＃22，担任が他児を抱っこしていると，機嫌が悪くなり，泣きそうになるA。しかし，泣いて抱っこしてもらうのではなく，自ら「ガーゼー」とタオルを取りに行き，我慢する。また，＃23で姉と離れなければならない時に，泣かずにいることができた。＃24になると，タオルを持っている姿も見られなくなり，安定してきているA。転ぶと泣くことはあるが，すぐに泣き止み，Aが頼もしく感じる（＃25）。一方で，「揺らしてー」と甘えることが多く，担任の後をずっとついていく姿も見られる（＃24）。＃27，28では，機嫌よく遊んでいたと思いきや，「かあか～」と泣き，担任に甘えている場面も見られる。

第5期　Aが自立へと向かう時期：11月

＃29，よく話しかけてきてくれるA。タオルは持っておらず，変な顔をして見せてくれたり大きな声で話したりして，楽しそうに遊ぶ。＃30では，大きな声で「ふくみちゃーん」と筆者のことを呼ぶ。ブランコでも，まずは筆者の名前を呼んで「揺らしてー」「立って揺らしてー」と要求。タオルはズボンのウエスト部分に掛けていたが，1人で赤ちゃん人形の着替えをさせたり，保育園で歌った歌を大きな声でよく歌ったりと，楽しそうにしている。また，年上の子どもと口げんかしている場面もあり，Aがしっかりしてきたように感じる。

Ⅳ　事例B

1．臨床像（X年4月1日現在）

B：1歳1ヶ月。男児。1歳児クラス。おとなしく，一人で遊ぶ。外に出ても，あまり動こうとしない。

2．経過　Bの発言「　」，筆者の発言〈　〉

第1期　非言語コミュニケーションを介してつながっていく時期：4月～6月

＃1～＃9までは，Bとの関わりがほとんどない。＃10，Bのお気に入りである，車がスロープを降りていく木の玩具（以下：車の玩具）で遊んでいたので，筆者はふとBの横へ座る。Bは今までも頻繁に1人でそれで遊んでいた。しかし今回は，筆者がBの遊びを見ながら，車が上手く降りていく際には彼と目を合わせて喜ぶというやり取りに発展する。さらに，目を合わせて喜ぶ時に，筆者が彼の頬を触ると笑顔になり，車が上手く降りるたびに，筆者の方を見て笑うB。少しずつBとの距離が近づき始めたように感じる。＃12では，園庭での遊びはほとんどしないが，部屋では，車の玩具で遊んでいる様子が見られ，車が上手にスロープを降りて行くと筆者と目を合わせ，ニコッとする。Bと筆者のコミュニケーションにおいて，車の玩具は欠かせないものとなってくる。

第2期　遊びが展開し，楽しさを共有できてくる時期：7月

部屋へ入るなり，車の玩具の前へ行き，1人で座るB（＃13）。車をひと滑りさせると，ままごとへ。筆者にもご飯を渡してくれ，〈もぐもぐ〉と食べるという遊びが繰り返される。そのうち他の玩具が気になり始めるB。L字型の金具を穴の開いた箱の中に入れていく玩具（以下：L字の玩具）で遊ぶことに。それが机上にあったために，座ると手が届かなかったということもあるのか，筆者のひざの上に乗り，2人で遊ぶ。L字型の金具が箱の中に上手に入ると，彼は筆者と目を合わせてニコッとし，手をたたく。＃14では車の玩具の前で座っているものの，それで遊ぶのではなく，L字の玩具で遊ぼうとする。L字の玩具で遊んでいる時にも，筆者が彼の横で座り，成功すると，やはり2人が目を合わせて笑顔で“パチパチ”と拍手する。車の玩具の車が床に落ちているのを見つけると，滑らせようとしてその玩具の方へ寄っていく。そして同様，成功すると，目を合わせて笑顔で拍手する。

＃15になると，目を合わせてパチパチと手をたたくのに加え，筆者も同じように入れてみて成功すると，Bはこちらを見て笑顔で同じように手をたたいてくれる。ままごとでは，筆者の口元までスプーンを運んできてご飯を食べさせてくれる。〈もぐもぐ〉とすると，どんどん食べさせてくれ，B自身も，もぐもぐする。相互のやり取りが充実してきたような印象を受ける。

また，園庭でも，少しずつ遊びを楽しめるようになってくる（＃13）。滑り台を何回も繰り返し滑るB。筆者が滑り台の下で待っていると，彼は楽しそうな笑顔を見せる。＃16では，遠くから〈Bくーん〉と手を広げて待っていると，ニコニコして駆け寄ってくるB。

最初の頃に比べ，非常に笑顔が増えてきたB。筆者のこともだんだん分かってきたようで，目が合うと微笑む。その一方で，玩具を棚にぶつけ，“コンコン”と大きな音を出すのを楽しんでいることもあり（＃14），いたずらっ子のような場面もうかがえた。

第３期　Bとの関係が築けていくと共に，彼の成長も見え始める時期：８月～９月

＃17，別の玩具で遊ぶが，隣でL字の玩具で遊んでいる子どもがいると，そちらに気を取られそれで遊ぼうとするが，見ているだけのB。＃20では，筆者を見つけるとL字の玩具を持ってきて，「これで遊ぶ」という感じでふたを開けるよう目の前に持ってくる。そして＃22になると，L字の玩具で１人で集中して遊ぶB。どんどん遊びがスムーズになっているようで，１人で全部入れることができると，ふたを自分で開けて金具を取り出し再び遊ぶことができるようになる。

筆者と目が合うとニコッと笑ったりウィンクしたり，たまに筆者のもとへ駆け寄ってくることも。園庭で遊んでいる時も活発に遊んでおり，楽しそうなBがうかがえるとともに，保育園での生活も安定しているような印象を受ける（＃22～）。

その一方で，玩具を棚の上でカチカチとたたいたり，窓にぶつけたりを繰り返す（＃17～）。やってはいけないことを伝えても，ニヤッとこちらを見て，再び繰り返す。また，集会の時にはじっと座っていることの多かったBが，多くの人がいるところでもうろうろと歩き回るなど，やんちゃな面が出てくる（＃19）。そして，＃20に遊んでいる最中，他児が割り込んできて横取りされると，今までの彼であれば，それを見ているだけであったが，今日はその子をたたこうとする。また，彼は玩具が入った箱を高いところからばらまく。〈それは他のお友達に当たったら痛いから，やめような〉〈Bくん，ナイナイしてくれる？〉と言っても聞いていない様子で，片付けようとはしない。筆者がうまく叱れなかったことも原因であったように感じる。それは，Bと筆者の関係が切れてしまうということを恐れていた部分があったからではないだろうか。自分の足りない部分に改めて気付くことができた。

第４期　遊びの幅が広がり，Bの表現力が豊かになってくる時期：10月

相変わらず，L字の玩具で遊ぶことが多い（＃23）。動物の積み木では，〈ゾウさんは～？〉と尋ねると，象の積み木を教えてくれることも。＃25では，Bが椅子に登って外を見ながら，車やトラックが通ると指差して「うーうー」とこちらを見て教えてくれたり，＃27では，母親と一緒に写った写真を指差して「ママ，ママ」と筆者に教えてくれたりする。

園庭では，筆者と一緒に山へ登ったり，Bがアスレチックで遊んでいる時に〈ばぁ〉と彼を驚かせると，声を出して喜んだりする（＃26）。また，保育士の真似をして遊んだりと，積極的に人と関わっていっているような印象を受けた（＃27）。

感情も豊かになってきたのか，今まで泣くことのなかったBが，頻繁に泣くようになる（＃26，＃27）。しばらく保育士に慰めてもらっていたが，保育士がいなくなっても泣いていた。泣きやみそうな時，たまたま筆者と目が合うと，Bは再び泣き始める。その時，筆者は他児と遊んでいたため，そちらに目が離せなかったが，少しするBの鼻水がすごかったので拭きに行くと，すぐに泣きやむ。

Ⅴ　考察

１．A，Bとの関わりを通して

最初の頃のAは，大人しく控えめな印象であったが，会うたびに少しずつ活発になってきた。これは，少しずつ象徴遊びが増えることにより，言葉数が増えていったことも１つの要素であったと考えられる。ままごとでは，Aが作ったものを筆者が食べる真似をしながら一緒になって遊ぶことで，Aの表現力も豊かになっていったのではないだろうか。また，相手から顔を隠し，そして出会うという“イナイイナイバァ遊び”は，自立と依存を象徴すると考えられ，乳幼児期の子どもにとって非常に意味のある遊びである。

また，Aと筆者の関わりに焦点を当て，全体を通して見てみると，山下（1999）の言う「依存と自立のサイクル」に似ているようにも感じられる。第１期では，前述の“イナイイナイバァ遊び”に見られるように関係性を作ることから始まり，第２期～第４期では，依存と自立を繰り返しながら安心という基盤をしっかりと固め，第５期になると，比較的安定した「依存と自立のサイクル」が成立していたという印象を受ける。

Aとの関わりにおいては，寝たいのに寝られないという，どうにもできない状況があり，とまどってしまう時もあった。＃５では代替案を出したり，＃６では他の話題に変えたりしてAの気持ちをそらせようとするが，

やはり同じことを訴えるA。振り返ってみると，筆者の対応は，Aのどうにもできない気持ちを放っておいたまま，その状況を変えようとしており，確かに無理があったように感じる。どうすれば良かったのかを考えていく中で，そのような場合，筆者はAの希望どおりにしなくとも，まずはその時のAの気持ちに寄り添って考え，どうにもできない気持ちを共有し，Aの分かる言葉で返すことが，彼女にとってしっくり来るのではないだろうかという考えに至った。カウンセリング場面においても，何とかしたいのにできないというような，同様の状況にあるクライエントと出会うこともある。その時にも，まずはその人の気持ちを尊重し，その気持ちがストンと納まるところを一緒に見つけていくということが重要であると考えられる。

Bとは，出会った頃はまだ言葉もしゃべることができなかったということもあり，主に非言語のコミュニケーションを介して関わった。つまり，言葉でないところの世界を共有したように感じられる。Bの成長にとれば，こちらが頻繁に言葉かけをすることにより，Bの言語発達を促すことができたのかもしれない。しかし，Bの気持ちに立って考えてみると，彼にとっては非言語のコミュニケーションが一番落ち着き，それが遊びの発展，保育園生活の安定につながっていったのではないだろうか。カウンセリング場面でも，言葉でないところの世界を味わうということは意味のあることで，山下（1999）が「自分と相手と2人がいるその場の雰囲気を，ぼうっと味わうような態度」の重要性について述べている。筆者は，面接中に沈黙になった場合，どうしても何か言葉かけをしなければと焦ってしまい，自ら話を切り出すということがあった。しかし，Bとの関わりを通して，言葉でないところの世界を共に味わうことの楽しさやおもしろさを感じた。それと同時に，自らも良い意味での余裕ができてきたように思う。

＃20では，玩具を他児に取られそうになったBが，玩具箱を高いところからばらまくという出来事があった。この時，筆者はBに注意をするものの，彼は聞く耳を持たない。これは，筆者の注意の仕方が他児に対するもので，Bにとれば納得のいかないものであったからということと，筆者があいまいな態度のまま注意してしまったことが原因として考えられる。Bとの関係が切れてしまわないかということを恐れ，いつもと変わりない態度で注意してしまっていた。それは，言葉は注意しているが態度は注意していないというBにすれば理解しづらい態度であったと思う。つまり，ダブルバインド（Bateson, G., et al.・1956）の状態がそこで生じていた。これは臨床場面でも制限につながることであるが，ある程度の関係性が築けているならば，Coは恐れることなく，やってはいけないことは，相手に伝わるよう凛とした態度で伝えなければならないということを学んだ。

どちらの事例についても，関係作りのきっかけは，その子の“お気に入りのもの”であった。カウンセリングにおいても，まずはクライエントとカウンセラーの関係作りは大切である。その時には，クライエントの趣味や好きなことなどをきっかけに話を深めていくことがある。そのため，カウンセラーは多くの知識や興味を持ち，つながるきっかけをたくさん持っておくことを忘れてはならない。ただし，関係作りを急ぎ過ぎると，クライエントとズレてしまう恐れもあるので注意が必要であると考えられる。村瀬（1981）は，「近づくことに性急になるより，よく観察すること」，「表面的な特徴にとびついたり，自分の期待しているところだけに目を注ぐのでなく，ありのままの姿を，想像，連想，思考などをもフルに働かせて，とらえること」が関係成立において重要なこととして述べている。

2．保育園での関わりと心理臨床

保育園での関わりを通して，改めて心理臨床との関連性を感じることができた。まずは，外部での実習を通して，臨床家を目指す者にとって必要な部分である社会性や常識といったところを学ぶことができたように感じる。これは，山下（2007）のいう「手のひら論」の手のひらの部分である。それに付け加え，常識というものは，基本的な部分はどの機関でも同じであるが，各機関において少しずつ違った部分も存在しているのではないかと気づいた。よって，その場に馴染んでいくためには，それぞれの場面で自分がどのように動いていけばよいのかを見極める力も大切であると考えられる。

また，柔軟な態度や臨機応変な対応についても，実習を通して学んだことの1つである。それは，特に子どもたちとの遊びの中で身に付けることができたように思う。子どもの遊びは，こちらが予想できないことも多々あり，それについていきながらも，一緒になって子どもたちといかに楽しめるかを考えていた。

今回の実習において，たくさんの子どもたちと遊びを通して関わることができたのは，非常に良い経験であった。東山（1995）は「遊びは，もっとも自然な自己表現であり，大人の言語に代わるものとして伝えたいことがイメージとして象徴的に表現されるもの」とし，「自発的な象徴的表現を通して，深く理解してもらえたと感じる時，子どもの不安が消え，外界と内界の統合へと向かうことができるようになる」と述べており，幼児保育と

カウンセリングの共通性を示唆している。実際に，子どもたちとの遊びを通じて，子どもの新たな一面がうかがえたり，ままごとではその子の背景にある家庭の様子や親子関係などもかすかではあるが見えたりと遊戯療法との共通性も感じた。さらに，共通する点として，連携の必要性が挙げられる。両者とも，その子を総合的に捉えるため，連携は必須である。多くの人の目で見てそれぞれの見立てをし，意見を交換し合いながら，その子をどのように理解していくかということが大切である。

A や B との関わりにおいては，目の前にいるその子をしっかりと見据え，その子の情動レベルを感じて同じように自分もそれに合わせてみること，寄り添うことが彼らとの関わりの上では不可欠であったように思う。それはまさに，「心臓と心臓を重ね合わせる」こと（山下・2007）であり，こころに寄り添うということであると実感できた。また，村瀬（1981）は，「相手の内的体験の世界に共に住むことで「相手と同じように感じられる」というひとつの現象的場に近づこうとする努力過程」として共感的理解を解釈しており，筆者は今回の研究を通して，それを少しではあるが理解できたように感じる。

また，目の前にいる子どもとの感覚をぼうっと味わうことによって，色々なことを感じたり，考えたりすることができた。山下（1999）は，「非言語レベルでの影響を受けるということこそ，感受性といえるものであろう。そしてその影響を受け感受したことによって，自分自身どのようなことが触発・喚起されたかを理解することは，非常に大切なことである」と述べている。カウンセリング場面においても，ただクライエントが話す言葉だけでなく，言葉ではない部分からも，カウンセラーはクライエントの様々な背景や感情を思いめぐらせながら話を聴いていくことを忘れてはならない。

最後に，今回の研究において，子どもたちの日々の成長を実際の目で見ることができたということは大きな糧となった。筆者自身も，子どもたちと共に少しは成長できたのかと感じることもあった。河合（1970）は，「カウンセリングを考えるとき，それはクライエントの人格の変容のみでなく，必然的にカウンセラーの人格をも，ひき起こす」とし，「カウンセリングをカウンセラーとクライエントの，両者の自己実現への共同作業に他ならない」と述べている。したがって，心理臨床活動をしていく中で，ともに成長していくことをクライエントと共に味わいながら，活動を行っていきたいと筆者は考えている。乳幼児との関わりを通して，今後の心理臨床活動につながるものを得ることができた。

引用文献

Bateson, G., Jackson, D.D., Haley, J. & Weakland, J. 1956 Toward a theory of schizophrenia. *Behavioral Science*, 1（4）, 251－264. In Bateson, G. 1972 *Steps to an Ecology of Mind.* Chandler Publishing Company. pp. 201－227.（佐伯泰樹・佐藤良明・高橋和久（訳）1986　『精神の生態学・上』　思索社　pp. 295－329.）

榎本博明　1985　「乳幼児期の親子関係」　若井邦夫（編）　『乳幼児の発達と心理』　三晃書房　pp. 93－103.

東山弘子　1995　「幼児保育と遊び」　氏原寛・東山紘久（編）　『幼児保育とカウンセリングマインド』　ミネルヴァ書房　pp. 63－77.

河合隼雄　1970　『カウンセリングの実際問題』　誠信書房

村瀬嘉代子　1981　「子どもの精神療法における治療的な展開 ― 目標と終結」　白橋宏一郎・小倉清（編）『児童精神科臨床２・治療関係の成立と展開』　星和書店　pp. 19－52.

Stern, D.N. 1985 *The Interpersonal World of Infant : A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology.* Basic Books, Inc.（小此木啓吾・丸田俊彦・神庭靖子・神庭重信（訳）　1989　『乳児の対人世界 - 理論編 - 』　岩崎学術出版社）

山下一夫　1999　『生徒指導の知と心』　日本評論社

山下一夫　2007　「臨床心理職養成課程モデル構築への試案 - 現状を踏まえて　専門家養成と『手のひら論』」　追手門学院大学・心のクリニック紀要，４，111－114.

山下一夫　2008　「教育支援を推進する教育心理臨床家に求められること」　藤原勝紀（編）『現代のエスプリ別冊　教育心理臨床パラダイム』　至文堂　pp. 83－89.

付記　本研究は，平成20年度の独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号，19530627）の交付をうけて行ったものである。

Concern with Infants and Clinical Psychology

—— An ideal method of the childcare training for clinical psychologist ——

YAMASHITA Kazuo*, NAKANO Hidemi** and NAKATSU Ikuko***

The purposes of this study were to collect awareness and learning that author experience in the day nursery, and to examine the concern with clinical psychology. The case took up two people who belong to the one year old child class and two year old child class that author was concerned a lot. As a result, about relations with infants, there were some common features with a psychology clinical scene, especially the importance of relationship was found. Moreover, it was suggested that sociality, common sense, a flexible attitude, snuggling up to a heart, and fostering sensitivity that is necessary for person who aimed at the clinical psychologist is obtained. In addition, the one that led to psychology clinical activity in the future was obtained.

*Practice of School Clinical Psychology, Naruto University of Education Graduate School
**A member of aide office work in the Counseling Room, Naruto University of Education
***Training and Practice in Clinical Psychology, Naruto University of Education Graduate School